



パット・メセニーと。2009年、ニューヨークにて。



チック・コリアと。2012年、ウィーンにて。

第一章 ヴィブラフォンってなんだ？

書齋に並ぶトロフィーで一番古いのは、一九五一年の全国マリンバコンテストで一等になったときにもらった、小さな真鍮のカップである（取っ手はずっと前にとれてしまった）。そのとき僕は八歳だったけれど、すでに二年の演奏歴があった。ドウ・コイン（イリノイ州南部の町。ハンブルトニアン競馬の開墾地として有名）で催された州立屋外市に祖父と両親が僕を連れてゆき、当時最大規模を誇っていたマレット奏者の大会に出場させたのだ。参加者は五十人ほどだったと思う。

群れをなす人々の前に立ち、彼らにできないことをしている自分を見せつけ、そのうえ喝采を浴びるのは、僕の胸を高鳴らせる出来事だった。あのトロフィーを勝ち取ったことは、なんらかの秘めたる能力が自分をどこかに連れてゆくかもしれないという最初の兆しだった。

さらに、インディアナの田舎が自分にふさわしい場所ではないことを、僕の本能はわずか八歳にして告げていた。

僕の両親、ウェイン・バートンとバーニス・アイシュは十代の若さで一九三四年に結婚し、父が世を去るまでの六十四年間をともに過ごした。父は苦勞して大学で学び卒業後は化学関係のエンジニアを目指したけれど、最初の仕事は週給九ドルの砂利掘りだった。雇い主は妻の父である。両親は経済的な理由から、大恐慌が過ぎ去るまで家庭を築けなかった。それでも一九四三年一月二十三日、僕ジェーム

ズ・ゲイリー・バートンは三人きょうだいの真ん中としてこの世に生を受けた。

家族にまつわる最初の記憶は、インディアナ州アンダーソン、デラウェア・ストリート二二〇七の生家である。僕は九歳までその場所で暮らした。五人家族の住まいとしてはいささか狭かったけれど、月十一ドルという家賃が魅力だったらしい。愛車は十三年落ちのフォードで、床に穴があいている代物。足元からは流れ去る路面が丸見えた。貧乏一家というほどではなかったにせよ、生活は質素そのものだった。父はアンダーソンにあるゼネラルモーターズの工場で十年ほど働き、僕たちきょうだいが生まれたころには、自宅から数ブロック離れた貸しビルでプラスチックの会社を始めていた。こうした慎ましい暮らしにもかかわらず、この時代の人々——とりわけ大恐慌の時代に生まれ育った親たち——は、自分たちが若いころに持てなかった物事を子どもに与えようとする。音楽のレッスンなんかもその一つだ。僕の両親には音楽の素養があったらしく、音楽を勉強したかったという父の言葉を何度も聞いた。妙なことに、両親の音楽歴を僕が知ったのは大人になってずいぶん経ったところである。いまでもわからないならかの理由で、二人とも自分たちの音楽経験を秘密にしていたのだ。一九九〇年代後半のあるとき、両親を訪ねた僕はいつものように家のなかを連れまわされたのだが、楽器を持つ十代の少年たちが写った古い写真に気づいた。目を凝らして見ていると、母がさりげなくこう口にした。「ああ、これ？父さんが高校生ときのバンドの写真よ」本当だ。最前列に立つ父はトランペットを手にしている！しかも、写真だけじゃ不満かとでもいうように、別の部屋の片隅に銀色の古いトロンボーンが転がっていた。これは誰のと訊いてみると、今度は父が答えた。「母さんのだよ。高校のバンドで演奏していたんだ」それをいまでも持っているとは！

それまで誰も気づかなかつたなんて、母はトロンボーンをどこに隠していたんだろう？ 両親が自分

もその曲がどんなものであるか——そして、自分の解釈をどのように奏でたいか——をよりよく理解できる。無意識の精神に与える情報が多ければ多いほど、演奏された音楽を好きになれる。「正しい音程」を演奏してミスを避けるだけでは十分じゃない。その音楽が持つ意味をとらえ、面白い物語にしてソロ演奏で聴かせなければいけないのだ。それを伝えられるのは内なるプレイヤーだけ。つまりは無意識の精神と協調しなければならぬということだ。

音楽が一種の言語である一方、音楽を聴く人の大半はその言語を話せない。僕がコンサートで演奏するとき、聴き手のたぶん九十五パーセントはミュージシャンでない人たちだろう。なかには少しくらいなら演奏できる人もいるかもしれないけれど、僕らが飛ばすようなテンポで演奏するなか、その詳細——全体性、メロディー進行、あるいは作曲上の構造など——を認識できるだけの知識や経験は彼らにない。進行中の音楽をリアルタイムで分析できるほど、知識のある人の前で演奏することなど滅多にないわけだ。たとえそうでも、プレイヤーはミュージシャンでない人間ともコミュニケーションをとることができない。そして最終的に、僕らは二種類の聴き手に届かなければならないことになる。つまりすべての音符を理解している同業者と、まったく異なる聴き方をしているミュージシャン以外の人間だ。

辛いなことに、音楽はこの断裂を乗り越えることができ、構造のいろはすら理解していない聴き手にも伝えることができる。ここでも再び、会話のたとえが役に立つ。ホテルのロビーで、近くにいる外国人ビジネスマンの一人が別の言語で会話している様子を想像してほしい。まずはこう考えるだろう。「言葉を一言も理解できないのだから、あの人たちが何を話しているか自分にはわからないだろう」しかし彼らを眺めていると、普遍的な情報が数多くわかりだす。まずは声のトーン。もし笑ったり微笑んだりしていれば、彼らが心地よいひとときを過ごしているとわかるはずだ。なかの一人が本を手を持ち、

不器用なスーパーマン

小曽根 真

ゲイリー・バートンは、演奏家として常に新しい音楽を作り続け、グラミー賞の受賞が七回、バンドリーダーとしてパット・メセニーやジョン・スコフィールドをはじめとする多くの次世代のトップランナー達を育てた。また、バークリー音楽大学では教諭としてだけでなく、学部長として全く新しいカリキュラムのプロデュースをし、その成功を元に副理事長という管理職のポストにつき、当時千五百人だった全校生の数が今では四千人と巨大化した現在のバークリーの基礎を築いた。大学や大学院でビジネスの修士や教育の博士号を取得せず、自らの力でとんでもないレベルの教養と知識を習得して、これだけの偉業を成し遂げるのはやはり、「スーパーマン」ではないか。初めて僕がこのとんでもないスーパーマンに出会ったのは、一九八三年、バークリーを卒業する時だった。それから三十四年経った今年、彼は音楽界から完全に引退することを決意した。

「マコト、ゲイリーはなぜ引退するの？ それについて君はどう思う？」

先月アメリカで行った“Gary Burton Final US Tour”の、この質問に答えるのは日課だった。彼のフ

ディスコグラフィ

ゲイリー・バートン名義

New Vibe Man in Town. Gary Burton, with Joe Morello, Gene Chericco.
RCA, 1961.

Who Is Gary Burton? Gary Burton, with Chris Swansen, Phil Woods,
Bob Brookmeyer, Clark Terry, Joe Morello, John Neves, Tommy
Flanagan. RCA, 1962.

Something's Coming. Gary Burton, with Jim Hall, Chuck Israels, Larry
Bunker. RCA, 1963; Reissued by RCA France, 1993.

Three in Jazz. Gary Burton, with Jack Sheldon, Monty Budwig, Vernel
Fournier. RCA, 1963.

The Groovy Sound of Music. Gary Burton, with Gary MacFarland, Ed
Shaunessy, Steve Swallow, Phil Woods, Bob Brookmeyer, Joe Puma,
Joe Morello, and string section. RCA, 1964.

The Time Machine. Gary Burton, with Steve Swallow, Larry Bunker.
RCA, 1965.

Tennessee Firebird. Gary Burton, with Chet Atkins, Steve Marcus,
Roy Haynes, Steve Swallow, Bobby Spicher, Sonny Osborne, Buddy
Osborne, Ray Edenton, Buddy Emmons, Henry Strezlecki, Charlie
McCoy, Kenneth, Buttrey. RCA, 1966.

Duster. Gary Burton, with Larry Coryell, Steve Swallow, Roy Haynes.
RCA, 1967; Reissued Koch Records, 1998. GRAMMY Nomination.

Lofty Fake Anagram. Gary Burton, with Larry Coryell, Steve Swallow,
Bob Moses. RCA, 1967.

索引

〈 〉は曲名を、『 』は特に記載のない限りアルバム名を示す。ローマ数字は写真の掲載ページを示す。

ア行

- アイシュ、セシル（母方の祖父） v, vii, 14
アイシュ、バーニス（母） v, viii, 12-13
アイヒャー、マンフレート 289, 322, 383, 394
～との活動 300
『アウト・オブ・ザ・ウッズ』 121
アースキン、ピーター 395
『アストル・ピアソラ・リュニオン』 392
アダレイ、キャノンボール 253
アーティガン、アーメット 266
アーティガン、ネスヒ 266-267, 280, 298, 384
アート・アンサンブル・オブ・シカゴ 314, 316
アドヴォケイト、ザ（雑誌） 237
アトキンス、チェット 50, 51, 54, 177-178
アトランティック・マンズリー、ザ（雑誌） 6
アトランティック・レコード 275, 280, 298-299, 394
～でのレコーディング 266, 268, 292
アバター・スタジオ 102
『アフターグロー』（映画） 329
『アフター・ザ・ライアット』 52
〈アフター・ユーヴ・ゴーン〉 24
- アームストロング、ルイ 25, 26, 30, 420
アメリカ大使館（在ロシア） 345-347, 349
アルコール 40, 133, 139, 160, 175, 176, 234, 309
RCA レコード 50, 51, 173, 183, 214, 215, 226, 227, 229, 266, 298, 299
～でのレコーディング 60, 71, 73, 94, 152-154, 174, 176-177, 218, 223, 238-239
～との契約 54-55
～との訣別 265
アルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノマスターコンクール 350
アルパート、ハーブ 139
アルバム、マニー 71
『アローン・アット・ラスト』 281, 288
グラミー賞 289-290, 292
『アンジャニューウ』 7, 237
アンソニー、ロン 99
アンダーソン（インディアナ州） 19
～の生家 13
安定期 410, 412
『アントニー・アンド・クレオパトラ』 225, 228
『アンド・ヒズ・マザー・コールド・ヒム・ビル』 291
イーグルス 233
ECM レコード 296, 317, 383-384
～でのレコーディング 289, 298-299, 312-313, 322, 334
～との訣別 394-395
イスハム、マーク 328
イスラエルズ、チャック 122, 128, 130, 189
イタリア 314-317, 384-385
1233 ラウンジ 76, 81, 84, 241
一体性 213, 397
『イツ・アバウト・タイム』 71
〈イツ・マイト・アズ・ウェル・ビー・スプリング〉 142